〈論文〉

ヤンキーうちなーぐちの言語社会学試論

打 越 正 行

1 はじめに[1]

本稿は、沖縄のヤンキー[2]の若者たちが話す「ヤンキーうちなーぐち」を言語社会学の視点から考察することを目的とする。彼ら自身がその言語を話すことをどのように意味づけており、その言語行動は彼らの集団や関係性でどのような機能を果たすのか、そしてそれは現在どのように変化しているのかについて描く。

以下では、まず沖縄のヤンキーの若者の実態について述べ、そのような若者を対象とした調査方法について述べる（2節）。続いて、言語社会学の視点からアプローチする有効性について指摘する。その視点にもとづき、彼らの言語だけでなく彼らが言語を用いる社会に着目する（3節）。そして彼らが生きる地元とは、地域や世代によってというより階層や職業によって分化した社会であることについて述べる（4節）。そのうえで、実際に彼らが話しているヤンキーうちなーぐちを紹介する（5節）。そして彼ら自身がその言語を話すことをどのように意味づけており、その言語行動は彼らの集団や関係性でどのような機能を果たすのか（6節）、また現在、ヤンキーうちなーぐちを用いる彼らがいかなる困難に直面しているのかについて考察する（7節）。

2 調査の対象と方法

筆者は2007年に沖縄の暴走族、ヤンキーの若者を対象とする参与観察調査を開始した。ゴーパチ（国道58号線）で、暴走し、それを見物するヤンキーの若者たちに、コンビニやファーストフード店で声をかけて調査を依頼した。調査において私は小型バイクで彼らを追走するうちに、顔を覚えてもらえ、2008年には彼らの地元にあるバイク倉庫（通称アジト）にまで通うことを認められるようになった。そして、彼らの多くが働く建設現場で参与観察を行うことができた。本稿のデータは、調査開始から5年ほどたった2012年に行っ

---

1 凡例は以下の通り。〈 〉は心情の補足、（ ）はその他の補足、そして〔 〕はうちなーぐちを翻訳した箇所である。なお、会話の補足は日本語の翻訳箇所にまとめて表記する。

2 ヤンキーとは、剃り込まれた髪形や逸脱したファッションなどのスタイルをまとった若者である（佐藤，1985）。調査を開始した2007年頃、私はそのスタイルや行動様式から、ヤンキーを特定の時代や世代における若者文化として捉えていた。しかし5年ほど調査を重ねても、自身をヤンキーとして自認する若者たちの生活や就労は過酷であり続け、その文化は世代や時代を超えてあり続けた。むしろ、ヤンキーは発生こそ日本社会だが、それは沖縄の産業構造にもとづいた沖縄文化、労働文化として位置付けるにいたった。ゆえに、本稿ではヤンキーを沖縄やその産業構造に根付いた文化として議論を展開する。

た調査からえたものである。地元の中学生が経験する先輩の「使いパシリ」として筆者も活動したことは、調査における信頼関係の基礎となった（打越, 2016）。

出会った頃に、彼らは私にわかるように日本語を話してくれていた。しかし、徐々に調査対象者の集団に入り込み関係性が築かれると、彼らは独自の「ヤンキーうちなーぐち」を話すようになった[3]。私は彼らの話していることがわからず、聞き返すことが度々あった。また参与観察を行っている場面で、急きょ調査対象者が人生を語りだすことがあった。その場合は、許可を得て録音機器（IC レコーダー）を用いた。それは沖縄のヤンキーの若者が話すヤンキーうちなーぐちを正確に記録するために外せない機器である。特に本土で生まれ育ち、うちなーぐちに精通していない筆者が、調査後に専門知識をもつ識者や辞典に頼りながら分析をすすめるために、録音機器は欠かせなかった。しかしICレコーダーを設置して録音するような、まるで警察の取締り室のような調査法は、本稿の調査対象である沖縄のヤンキーの若者には適さなかった。このような状況で、筆者は最初の５年は参与観察を中心にすすめ、下積みを重ねた段階で録音付きの生活史調査を始める手順をとった。地元で下積みを重ね、建設現場で共に汗を流すといった参与観察が基礎となり、生活史調査の録音は可能となった。このような「参与観察にもとづいた生活史インタビュー」という手法が、本調査で採用した調査法である。その手法によって、彼らの語りをその生活をもとに理解でき、また語りから彼らの生活に迫ることが可能となった。

続いて、調査対象である沖縄の暴走族やヤンキーの若者について紹介する。彼らは、10代の頃は地元の暴走族で活動していた。その後、彼らは地元の建設会社で働いていたが、それぞれの事情で地元を離れていった。学校や家族から、そして地元の暴走族、ヤンキーの若者たちのつながりや、彼らの多くが就く建設会社からも距離を取らざるをえない若者であった（打越, 2019, 2020b）。

本稿で扱う若者のプロフィールは次頁の通りである。しーじゃー〔先輩〕グループの太一、慶太、仲里と、そのうっとぅ〔後輩〕にあたる上地である[4]。彼らは同じ地元の中学出身であり、地元の暴走族で活動し、地元の建設会社である沖組で働いていた。仲里以外の３名は恋人や交際していた女性への暴力で逮捕された経験がある。４人とも結婚したがその後に離別し、上地を除く３名は元嫁や子どもとの交流はなくなっていた。この集団は、中学校時代の上下関係を基盤としており、それは普段の付き合いだけでなく、職場、余暇の場面、そして10代の頃だけでなく30代になってもその関係は終わらなかった。年を重ねていっても、そこでの力関係や関係の質に大きな変化はなかった（打越, 2018）。そのような苛酷な世界[5]を生きている若者たちが、本稿の調査対象者である。

---

3 ただし、本土出身の私に話している場面と、彼らだけで話している場面で、彼らの話す言葉や表現は異なった。私には基本的なフレーズや、頻度の高い表現を意識的に話してくれ、私に自分たちの言語を教えようと配慮してくれた。

4 本稿で登場する人物などの名称は、すべて仮名である。また本人が特定されないように人物に関する情報は、一部で変更を施している。

表　プロフィール

名前	年齢	学歴	警察経験	居住形態	仕事	結婚
太一	＋3歳	高卒	あり（元妻へのＤＶ、繁華街での暴行）	レンタルアパート（仲里と同居）	建設業（元沖組従業員）	離別（元妻・子ども交流なし）
慶太	＋2歳	中卒	あり（恋人への暴行）	公営住宅（自身の親家族、姉の家族と同居）	建設業＠関東（元沖組従業員）	離別（元妻・子ども交流なし）
仲里	＋3歳	中卒	なし	レンタルアパート（太一と同居）	建設業＠関東（元沖組従業員）	離別（元妻・子ども交流なし）
上地	－	中卒	あり（元妻へのＤＶ）	実家（父、母、兄と同居）	建設業（元沖組従業員）	離別（元妻・子ども交流あり）

※年齢は上地を基準として表記した。

3　生きた文化としての言語へ

3.1　うちなーやまとぅぐち／沖縄の若者言葉

沖縄のヤンキーの若者が話す「ヤンキーうちなーぐち」について考察するために、関連する「うちなーやまとぅぐち」、そして沖縄の若者言葉についての先行研究を概観する。

まず、かりまたしげひさは、うちなーやまとぅぐちを、通商の場面などで人工的につくられ、母語話者も複雑な言語体系ももたないピジン（pidgin）としてではなく、それらを併せ持つクレオール（creole）として位置づけ、残り続けるものとみる（かりまた, 2006; 2008）。それに対して、屋比久浩は、うちなーやまとぅぐちを、クレオールでもピジンでもなく、「日本語が沖縄方言に取って替わる言語転移の過程において起こった様々な干渉又はその結果うまれてきた色々な言語作品等を含む多種多様な言語現象（屋比久, 1987: 119）」と述べる。屋比久は、完全ではないがウチナーヤマトゥグチはいずれ消えゆくものとみる。

本稿で扱うヤンキーうちなーぐちは、安定して残るものでも、消えゆくものでもない。それは大城朋子のいう「生き続けて」いる言語である。

> 「しまくとぅば」は、現段階では、一握りの高齢者の手に、また、研究者の手によって、そして社会が蓄えた記録や人々の記憶の中にかろうじて「生き存えて」いる。それに対して、「うちなーやまとぅぐち」は、壮年層から若年層（幼年層）の間で変化しながら「生き続けて」いる。（大城, 2017: 336）

大城は、アーカイブされた言語としてではなく、生きた文化としての言語に注目する。そしてそれを実践しているのが沖縄の若者たちであると述べる。

5　過酷な世界とは、学校や家庭といった生活基盤を欠き、地元の先輩との強烈な上下関係に行きつくこと、そしてそこで生じる略奪と暴力であり、そしてそれがいつまでも終わる見込みがないことである。詳細は、打越（2020b）に詳しい。

高江洲頼子も、うちなーやまとぅぐちを網羅的に記述したうえで（高江洲, 1994）、ウチナースラングの存在を明らかにする。それは「方言をしらない世代が方言を断片的にとりいれた会話。同世代の仲間うちではなされる俗語」と位置付ける（高江洲, 2002: 152）。

新城和博は、若者文化により接近し、時代を反映した世代やそのローカルでしか通じない「うちなースラング」に注目する[6]（新城, 1990: 235）。また石崎博志は、ヤンキーの女の子たちが、自らの優位性を周囲にアピールする手段（マウンティング）として方言が用いられていることについて述べた学生レポート[7]を紹介している（石崎, 2015: 142-143）。

このように静態的に言語を記録するだけでなく、それが若者たちの生きる世界でいかに動態的に意味づけられているのかを描くことも注目されつつある。

3.2 言語社会学という視座

上述したような問題意識に焦点を当てるのが言語社会学である。アメリカの社会言語学者である、フィッシュマン（Fishman）は、言語について、なにかを名付ける際の「指示的意味（referential meaning）」だけでなく、表現的かつ象徴的な意味（expressive and symbolic meaning）に注目した（Fishman, 1972=1974）。それは沖縄のヤンキーの若者たちが用いる言語が、その集団や関係性における機能を考察する際に有効な視点である。フィッシュマンはそのような問題関心、研究領域として言語社会学の意義を提唱する。

> 言語社会学は、言語使用それ自体だけではなく、言語への態度や言語および言語使用者に対する顕在的行動を含む、言語行動の社会的体系に関連する問題の全領域に焦点を当てるのである。（Fishman, 1972=1974: 3）

本稿では、ある言語を音韻や文法などによって、既存の言語体系に位置付け分類するのではなく、その言語が用いられる集団や社会関係での象徴的な意味やその変化を描くことを目的とする。そして人びとが用いる言語やその言語が交わされる社会における象徴的な意味によって、彼らが生きている社会の変化、そして困難について述べる。

4 沖縄のヤンキーの若者が生きる社会

沖縄では集落ごとに方言が異なり、それは相互に理解が難しいほど多様であった。しかし現在の沖縄でそのような方言を話して生活している人びとは、少なくなってきた。方言

---

6 新城は、「ひざまづき〔正座〕」といったヤマト文化との接触によって生れた「うちなーやまとぐち」や、「ぐぁーしー〔不良〕」といった「うちなースラング」に注目する。「ぐぁーしー」は、通常なら「……する振り」という意味だが、「不良ぐぁーしー」を経由し、「ぐぁーしー」だけで不良を意味する言葉となった。不良になりたての少年らが、ファッションや振る舞いから変わっていく過渡期の様子を捉えている（新城 1990: 235）。

7 沖縄県立芸術大学の波平八郎へ提出された國吉美和によるレポートである。

を話す人びとが高齢化し、学校教育、そしてメディアの影響を受けたことが要因として考えられる。また都市化と人口集中によって本土や那覇に移動せざるをえなかった人びと[8]、商売をすすめるために「標準うちなーぐち」を身に付けた人びと[9]、そして大学に進学し公務員となるために日本語を身に付けた人びとなどもいる。このように言語には、その人の人生や生活の記録が刻まれている。

そして、ヤンキーうちなーぐちも、沖縄のヤンキーの若者たちが生きてきた社会の様子がはっきりと刻まれている。その言語と生きた社会の対応をつかむため、彼らが生きている社会とそこでの言語使用について、簡単に紹介する。

3節で紹介した4名の男性たちは、普段の生活や仕事では、うちなーぐちを話す。それは学校で習う日本語とは大きく異なる言語である。彼らの生活言語は、日本語ではなくうちなーぐちである。2012年の沖縄で30歳前後であった若者が、日常的にうちなーぐちを話すにいたった背景をおさえる。

まず彼らはほとんど学校に通っていない若者たちである。太一は身体能力が高く部活動で高校に進学したが、他の3名は中学卒業後に建設業に就いている。学歴は中学卒業であるが、実際には小学生の頃から万引き等の非行を繰り返し、中学に入ると深夜徘徊、暴走などで補導され、ほとんど通学した実績はない。このように、彼らは日本語を教育される機会が少ない環境で育ってきた[10]。

また生まれた家族も、彼らの生活言語がうちなーぐちである一要因となっている。太一のように小学校の頃に親が離婚したり、上地のように仕事で忙しくて祖母に育てられたケースも少なくない。このように父親や母親ではなく一世代飛び越えて祖母や祖父に育てられることで、直接に聞き話す機会を通じて、彼らはうちなーぐちを習得している。

そして中学を卒業した彼らの多くが向かうのは、建設現場である。そこでは年配の親方も中堅の班長もうちなーぐちで指示を出す。うちなーぐちを理解することは、建設現場で働くための実質的な条件となっていた。

最後に、4人ともテレビをあまり見なかったし、映画館にもめったに行かない。どちらも見ていると眠くなると彼らは話した。このようなメディア環境にあることも、その言語環境にいたる見逃せない要因である。

このように彼らの生きている社会では、日本語を習得する機会は少なく、うちなーぐちを習得する環境が整っていた。彼らは小さい時からうちなーぐちの環境に育ち、また歳を重ねてからもそれを実際に話し、聞く環境にあった。

---

8 たとえば、通常、沖縄では妻や嫁のことを「とぅじ」と呼ぶことが多いが、本土の建設会社で長年働いた沖縄出身のよしき（50代男性）は、配偶者のことを「かみさん」と呼んでいた。

9「首里・那覇は琉球王朝時代には政治、経済、文化の中心地であって、そこで話されている方言を中心に沖縄芝居における演劇ことばも発達し、首里・那覇の方言は琉球方言における共通語としての役割をになってきた（高江洲, 2004: 303)。」

10 対照的に、私が講義を担当した琉球大の沖縄出身者は、本稿で扱うヤンキーうちなーぐちもうちなーぐちも理解できない学生が多数を占める。このように学校教育は、言語使用を大きく方向づけている。

続いて建設現場におけるうちなーぐちについて述べる。建設現場において作業を習得する場面では、組織的、意図的に新参者を育てたり、統一したマニュアル（教科書）のようなものはなかった[11]。教育的働きかけに用いられる言語は意思疎通を目的とし、また教科書は書かれた言語によって成り立つものである。他方で、建設現場で用いられる言語は単純な指示に限られる。たとえば、現場の作業において、先輩は「だー（おい）、とれ」といった指示を出す。新参者はこれを「（何かを所定の位置から）はずせ」という意味か、「（何かを）持ってこい」という意味か読み取らなければならない。目的語も省略されており、極めて文脈依存的な言語である。特定の先輩と作業するなかで先輩が求めている作業を的確につかむ能力がここでは求められる。製造業と異なり建設業の作業手順（癖も含む）はそれぞれの先輩によって異なるので、一度つかんだ作業手順と先輩の指示を的確に把握する能力は、異なる先輩のもとでは役に立たない場合が多い。建設業はとにかく結果を重視されるため、少々作業手順は荒くても、納期までに作業を完了させる会社が信頼をえて規模を拡大していた。ゆえに、納期さえ守られれば、作業手順のプロセスは重視されなかった。

他方で製造業では、仕事がマニュアル化され、それをもとに従業員間で相互に指示を出し合い、効率よく働くための反省や指導が定期的に行われる。しかし沖縄には製造業が少ないため、そのような汎用性のある言語によって可能な作業にあたる機会は少なく、結果として特定の先輩の下で働くためにその先輩の言語などを習得しなければならない環境に、彼らは生きていた。

また沖縄の周辺層の若者のうち、性風俗業や違法就労に就く若者もいる。性風俗業ではキャッチとして客を呼び込みしたり、キャバクラ店のキャバ嬢の悩み相談などで、高度な言語能力が求められる。これは違法就労のサラ金回収業などでも同様である。またおれおれ詐欺にかかわる沖縄の若者は、方言やイントネーションで身元がばれるため電話対応ではなく、ほとんどATMで出金作業を行う「出し子」が中心であった。

このようにヤンキーうちなーぐちは、沖縄の暴走族、ヤンキーの若者で、その後に建設業に就く若者たちが習得する言語といえる。それはそれぞれの地域別、また世代によって異なるものではなく、階層と職業によって表れる層の若者たちが用いる言語である。つまり、３節で述べた言語が用いられる社会的体系とは、地域や世代によってでなく、階層や職業によって分化した社会である[12]。

以下では、沖縄のヤンキーの若者たちが話すヤンキーうちなーぐちを紹介し（５節）、それが用いられる社会的体系について述べる（６節）。

---

11 マニュアルベースの製造業と先輩の癖や感覚をベースに働く建設業の差異に注目し、沖縄の建設業とそこで働く若者たちについて論じたものとして、打越（2020a）がある。

12 地域による区分がないわけではない。例えば中南部のヤンキーの若者たちは、北部や離島のヤンキーの若者たちの方言をよくばかにした。しかしそれは、中学校区規模でなく、エリアの大きい区分となっている。

5 ヤンキーうちなーぐち

ここでは、地元の暴走族、ヤンキーから、地元建設会社に就き、そこから排除された男性たちが話すヤンキーうちなーぐちを紹介する。具体的には、2012年の夏、太一、慶太、仲里、譲司、上地らのグループに対して行った調査での３つの場面を扱う。それぞれ録音データを文字化し、それに拙訳を付したため長くなっているが、本稿で最も大事な部分なのでそのまま記載する。

5.1 太一との語り合い

2012年８月15日の夕方、仲里のアパートで太一と私は泡盛を飲みながら語り合った。太一は離婚し家を出された後に、同じ地元の仲里が住むレンタルアパートに、居候していた。また地元の後輩である上地が元嫁へのDVで勾留されていた時期で、この日に私は太一と上地の面会に向かい、その後仲里のアパートで2人は語り合った。

場面１

私と太一は、この日の夕方に勾留されている上地の面会に向かった。面会の場で上地は出所したらまたバイクに乗って遊びたいと話した。面会場面にいた立会職員から、私と太一は帰り際に引き留められた。そこで上地のこれからが心配であることを率直に伝えられた。太一は地元の後輩が心を入れ替えていない様子に不安を感じていた。泡盛を飲み始めた直後、その不安について語る場面である。

（ヤンキーうちなーぐち）

太一　やくとぅ、わったーも、ふらーと、思われとんばー。面会来てる人間も、あー、やっぱり、これの面会来てる人間はー、これレベルだなと思われてるわけさー。はっきり言ってよ。

――　はいはい。

太一　違うさあ、違うよと。俺なんかは、おまえに、よくするがための、がんばれよーと、これから先、出た後どうするのかと、この後のことを考えての、な、反省してるかと、こういう意味での面会やし。

――　はい。

太一　あれは、「ふーん、あったー、でーじだねえ」って、こんな話してるさあ、こんなのじゃないばーよ[13]。

――　はいはい。

---

13 この「ばーよ」には、「上地も自分たちも似た者同士として警察は見ているが、そうでないよと言いたい。自分たちは上地のことを心配しているんだよ。心配できるように物事を見ることができるんだよ」という思いが込められている。

太一　あらんばーて、だから、あれが「ちょっと待て」って言ったのは、これがはじめてだったって言ったさー。

――　そうですよ、なんかあるんかと思ってねえ。

太一　は、こんなって言われたけど、あるのって言われたさ。くりやったんばー。「出た後もおんなじするよ」と、あったーも感じてるばーよ。「おんなじこと繰り返すよ、この子は」と。「ふ、あれが悪くないよと。本人が悪いからがこっちに連れて来られてるんだ」と、ほ、こんだけは、ほ。

――「わかっといてよ」と。

太一　わかっといてよという意味で、面会してる俺なんかにも伝えてる。

――　あんな、特別なことですからね、あんなことあるのは。私はじめてですから。

太一　そうじゃないと、あんなって伝えん。違うよやあ。

――　はいはいはい。

太一　まだ俺、ましだろ。

――　はい。

太一　話わかるから、やるときはやっすんどー、やしが話わかる人間いやさりんぐぁー。

――　おもしろいですねえ。

太一　は、ほ。

太一　だから、ヤクザじゃないばーよ、今。しにうーまくーだった、わー、あしばー、そういんよ。

――　はい。

太一　今。

太一　でーじな、うーまくーだった、いま、なまあしばそういんよ。

――　うんうん。

太一　あーんし、仕事してるさ、ちゃんと。

――　はい、そういう、あしばーなるような、チャンスはありましたか？機会は？

太一　あるでしょ、何回も。

――　ありましたか？

太一　友だちもあしばーだし、先輩もあしばーだし、しかも今、くまれてるし。

――　誘われたりとか、事務所行ったりとかもありますか？

太一　事務所行ったりもある、何回もある。

太一　「はっ、にいにい、いい体格してるなー、おまえ、わったーむけだなあ」って言われたけどよ。

（日本語）

太一　だから、（警察官から）俺たちもごろつき仲間と思われているんだよ。面会に

来ている人間も、「あー、やっぱり、これ（上地）の面会に来ている人は、この程度のレベルだな」って思われているわけよ。はっきり言ってよ〈こんな風にしか、俺たちのことを見てないんだ〉。

―― はいはい。

太一 （それは）違うさー、違うよと〈言いたい〉。俺なんかは、おまえ（上地）に、よくなってもらうためのがんばれよーと、これから先、出た後をどうするのかと、この後のことを考えての、な、反省してるかと、こういう意味での〈上地のことをきちんと考えての〉面会なんだよ。

―― はい。

太一 あれ（立会職員）は、「ふーん、あいつら（上地たち）、大変だね」って、こんな話をしてるさー、そうじゃないんだよ〈俺たちは似た者同士と、悪くみられているが、それは違うよと言いたい〉。

―― はいはい。

太一 違うんだよ、だから、あれ（警察）が「（私たちに）ちょっと待て」って言ったのは、「これがはじめてだった」って言ったさー〈はじめて俺に「意見」を伝えたというのには、そういう意味があるんだ〉。

―― そうですよ、（職員にとめられた時に）なにがあるんかと思ってねえ。

太一 は、こんな風に言われたけど、「（上地が同じことを繰り返すという見方は）持ってるの」って言われたさ。こんな話をしてくれたさ。「出た後も同じ事をするよ」と、あいつら（立会職員）も感じているのよ。「（このままだと）同じ事を繰り返すよ、この子（上地）は」と。「あれ（上地の元嫁[14]）は悪くないよ。本人が悪いからこっちに連れて来られているんだ」と、ほ、ほ、「これだけは」。

―― 「わかっといてよ」と。

太一 （こういうこと）わかっといてよ（という意味で）。面会に来ている俺なんかにも伝えてるのさ。

―― あんな、特別なことですからね、あんなことあるのは。私はじめてですから。

太一 そうじゃないと、あんなって伝えん。（観察者に同意を求めて）違うよなー〈そうじゃないと、わざわざ俺なんかにも言わないよね。わかっているさ、このくらい。そうだよね〉。

―― はいはい。

太一 まだ俺、ましだろ〈物事をきちんと考えることができるんだよ〉。

―― はい。

14「あれ」は、警察ではなく元嫁として解釈した。勾留されることやその期間は、彼女によって被害届が提出されるか取り下げられるかによって変わる。ゆえに彼女の裁量によって上地の状況が変わりえるこの時期は、逆恨みが生じやすい。それに対し、立会職員は彼女が悪いのではないということを太一に伝えている場面と解釈した。

太一　話（言っている意味）はわかるから、やるべき時はきちんとやるよ、そうだから俺は話をわかる人間がいると癒されるよ。

――　おもしろいですねえ。

太一　は、ほ。

太一　だから、（俺は）ヤクザじゃないんだよ、今は。〈昔は〉とってもヤンチャ坊主だった。〈そのままだと今ごろ〉俺、ヤクザ、していたよ。

――　はい。

太一　今。

太一　（以前は）とっても大変な、ヤンチャ坊主だった。〈あのままだったら〉今ごろ、ヤクザしているよ。

――　うんうん。

太一　（みてのとおり）、仕事してるさ、ちゃんと。

――　そういう、ヤクザになるような、チャンスはありましたか？機会は？

太一　あるでしょ、何回も〈あったよ〉。

――　ありましたか。

太一　友だちもヤクザだし、先輩もヤクザだし、しかも今、刑務所行ってるし。

――　誘われたり、事務所行ったりとかもありますか？

太一　事務所行ったりもある、何回もある。

太一　「はっ、兄さん、いい体格してるなあ、おまえ、ヤクザの素質もっているな」って言われたこともあるよ。

場面２

太一と泡盛を飲みながら語り合ううちに、彼は父親について語った。彼は小学生のころに父親とは離別しており、その後、父親は本土で暴力団関係者として地位を築いていた。そんな父親からの久しぶりの電話について語り出した。

（ヤンキーうちなーぐち）

太一　おとーかい、電話かかってきたからーて、最近。「やー、ほんとにやる気があるんだったら、紹介する」と。

――　ほー、なにをですか？組ですか？

太一　組よ。

――　おお、親父さん、今なにされてるんですか？

太一　今は、もうヤマトで、なんかもう、堅気だってるけど、もう会長クラスのあれになってるから。「おまえがほんとにやる気があるんだったら紹介するよ」、でもな、はー、でもな、でもなよ。わかるでしょ？いいところもあるけど、なんて言うんだったこれ、あれもあるさ、10万[15]、10年くまる意地あるの？ 10年ぐらい。要は、いち

むどやーよ。わーが教えてさあ、さっき、いちむどやーなんだった、はい？

―― いちむどやーはですね。

太一 いちむどやー、方言で、言ったさー、いちむどやー。ひっちー、刑務所行く人よ。

―― はいはいはい、はいはい、行ったり来たり。行ったり来たり。

太一 「行ったり来たりの根性あーみー？あんな、あーしーねーから、親分かいになるよー」と、「上にはたてるよ」と。「いちむどやーするちむぐぁーあんな」。

―― あるかと、親父さんに聞かれたわけですか？

太一 「10年くらいくまるぐらいの根性あーみー、紹介する、親分のみーあんどー」。

―― うんうん、へえ。

太一 ヤマトだよ、沖縄じゃないよ、「紹介するみあんどー」、「あんな、へえへえー、今の世の中ふらーらりん、ヤクザしてられるか、ボケ」って、ぶしってきってから（笑）。

（日本語）

太一 親父から電話がかかってきてから、最近よ。「おまえ、ほんとにやる気があるんだったら、紹介する」と。

―― ほー、なにをですか？組（暴力団）ですか？

太一 組よ。

―― おおー、親父さん、今なにされてるんですか？

太一 今はもうヤマトで、なんかもう、堅気になってるけど、もう会長クラスのあれ（地位）になってるから。「おまえがほんとにやる気があるんだったら（暴力団関係者に）紹介するよ」（と言われた）。でもな、はー、でもな、でもなよ。わかるでしょ？いいところもあるけど、なんていうんだったこれ、あれもあるさ、10万、10年、刑務所に服役する覚悟あるの？10年ぐらい。要は、いちむどやーよ。俺が教えただろ、さっき。いちむどやーなんだった、はい？

―― いちむどやーはですね。

太一 いちむどやー、方言で、言ったさ、行ったり来たり。何度も刑務所行く人よ。

―― はいはいはい、はいはい、行ったり来たり。行ったり来たり。

太一 「行ったり来たりする根性あるか？あんな、このようにやる、やってから、親分の代わりになる（身代わりに刑務所に行く）と、上にはたてるよ」と。「刑務所に入り浸る人になる根性あるか」。

―― あるかと、親父さんに聞かれたわけですか？

太一 「10年くらい服役するぐらいの根性あるか、〈あるんだったら〉紹介する、親分になる素質はあるぞ」。

---

15 10年を10万と言い間違えていると解釈した。

―― うんうん、へえ。

太一　ヤマトだよ、沖縄じゃないよ、「紹介することはできるぞ」と（言われたけど）、「あんなペコペコして今の世の中フラフラしてヤクザしてられるか、ボケ」って、（電話を）ぶしって切ってやったよ（笑）。[16]

場面3

太一は10代の頃から路上での喧嘩を繰り返し何度も警察沙汰となってきた。その後は格闘技を始め、地元の試合や大会で好成績を残した。彼の地元の人間は、太一が格闘技で成績を重ねることを尊敬しつつ、時折、繁華街で暴れる彼から一定の距離をとっていた。酔いも回ってきて、そんな彼が突然、弱音を吐いた場面である。それは彼の人間観、対人観を示唆する場面である。

（ヤンキーうちなーぐち）

太一　あらんどー、わー、やる時は、ほんとにやるし、自分を力にした時には、でーじ力になるからよ。逆に自分がなよってた時には、助けてください。本当に。いくら「強い強い」って言われても、人間ですよ。

―― はいはい。

太一　自分も。

―― やっぱ、心が折れそうなことも。

太一　折れそうなことも多々ありますよ。

―― あー、そうですか。

太一　あのさー、人間やむんやあ、ちゃーすがーやー。

―― まあそれはねえ、

太一　人間でありむん、ちゃーいむん。

（日本語）

太一　違うよ、俺は、やる時は、ほんとにやるし、自分に頼ってくれた時には、全力で協力するからよ。逆に自分が弱ってた時には、助けてください。本当に。いくら「強い強い」って言われても、（俺も）人間だよ〈だから、弱音を吐く時もあるよ〉。

―― はいはい。

太一　自分も。

―― やっぱ、心が折れそうなことも。

太一　折れそうなことも多々ありますよ。

---

16 太一は、父親から期待しているとの高い評価を受けたが、それを俺は拒否したということを強調している。

―― あー、そうですか。
太一　あのさー、人間だからさー、どうするかねーと迷うときもある。
―― まあそれはねえ、
太一　人間だからさー、いつも同じじゃないよ。

場面4

上地が元嫁に対するDVで勾留された時、私は地元の先輩から指示を受けてほぼ毎日面会に向かうこととなった。そのことを伝え聞いた太一が、自身の刑務所経験を振り返りながら、私のことを評価してくれた場面である。

（ヤンキーうちなーぐち）
太一　わったーの仲間やし、上地のこと、はっきり言って。
―― 私も上地にいろいろほんと教えてもらって、勉強さしてもらっている間柄ですから、そんなねえ、ぜひできることはしようということで、まあ私は今回、夏休みでこっち来とんで、みんなも行きたかったらしいんですけどねえ、面会ねえ、私にできることは面会に行くことくらいかなあと思って。
太一　違うよ、ふん、船越さん[17]、毎日、こんな行ける人、逆に自分からなんかからしたら、死に嬉しいよ。わーもわかいーんよ、わー、面会来られたことしょっちゅうあるからよ。困った時よ、どんなに嬉しいからよ。今日、でーじ嬉しかったはずよ、じゃー、最終的に明日出れるさ。
―― はい、はい。
太一　船越さんも来てるやし、わーもちょうしええやあ、死に嬉しかったはずよ。
―― まあ、ねえ、バカ話もして笑ってましたよねえ。心からねえ。
太一　さにかいて。

（日本語）
太一　（上地は）俺たちの仲間だろ、上地のこと、はっきり言って。
―― 私も上地にいろいろほんと教えてもらって、勉強さしてもらっている間柄ですから、そんなねえ、ぜひできることはしようということで、まあ私は今回、夏休みでこっち来とんで、みんなも行きたかったらしいんですけどねえ、面会ねえ、私にできることは面会に行くことくらいかなあと思って。
太一　違うよ、ふん、船越さん、毎日、（面会に）こんな行ける人、逆に自分からしたら、とっても嬉しいよ。俺もわかるよ、俺、（以前、勾留された時に）面会来られたこ

17 打越という苗字は沖縄でなじみのないので、よく間違われるうちに意図的に間違え、からかわれるようになった。そのうち日常的に間違われるようになっていた。

としょっちゅうあるからよ。困った時よ、どんなに嬉しいか。今日、とっても嬉しかったと思うよ、それで、最終的に明日出れるさ。

―― はい、はい。

太一　船越さんも来てるので、俺も上地も調子いいし、とっても嬉しかったはずよ。

―― まあ、ねえ、バカ話もして笑ってましたよねえ。心からねえ。

太一　〈今ごろ興奮して〉センズリこいて（自慰行為をして）〈いるんじゃないかな〉。

場面5

上の場面にあるように、太一も元嫁へのDVで刑務所に行った経験があった。そのことについて、話した場面である。

（ヤンキーうちなーぐち）

太一　こんだけ暴れた後に訴えられたの誰ですかと、奥さんよ。

―― 上地ですね？

太一　違うよ。

―― あっ、違うんですか。

太一　自分の奥さんに訴えられたばーよ、わー。

―― あっ、そうなんですか。

太一　やくとぅ、いっちょんばーよ。

―― 奥さんに何で訴えられたんですか？

太一　だから、やーわいよ、やーわい。

―― やーわいってなんすか？

太一　おうちで暴れてる。

―― あー、おうちで暴れてるって。はー、ほいであれですか、

太一　執行猶予。

―― 執行猶予なんですか。

太一　しかも、わー、略式で出れると思ったばーよ、は、じゃなかったからな。

―― はー。

太一　意味わかる？しかも最近もまた、みーとぅんだおーえーさーまて。

―― みーとぅんだ？

太一　おやっくわーよ。

―― おやっくわーってなんですか？すいませんうちなーぐちわからなくて。

太一　みーとぅんだーって言ったら、夫婦げんか。

―― 夫婦げんか、はい。

太一　してから、夫婦げんかで。

―― 警察沙汰と。

太一　電話して、あれが呼びよったばーよ。夫婦げんかで、奥さんが警察呼びよったから、もう終わりだと、わー、執行猶予の身分やし。

――　はいはい。

太一　はっ、訴えらりーに、わーくまーにし、はっきり言って、知念に、わかるでしょ、刑務所に。

――　行かなあかんですよねえ。

太一　知念にかまーさ、あれになって行ったから、「は、やー、まさかだろー、ゆくさー」っ言ったけど、けどこんなって、がーはりよったばーよ。

（日本語）

太一　これだけ暴れた後に訴えられたの誰ですかと（自問し）、奥さんよ（と自分で答える）。

――　上地（のこと）ですね？

太一　違うよ。

――　あっ、違うんですか。

太一　自分の奥さんに訴えられたんだよ、俺。

――　あっ、そうなんですか。

太一　だから、（刑務所へ）入っていたのよ。

――　奥さんに何で訴えられたんですか？

太一　だから、やーわいよ、やーわい。

――　やーわいってなんすか？

太一　おうちで暴れてる。

――　あー、おうちで暴れてるって。はー、ほいであれ（訴えられたの）ですか、

太一　執行猶予。

――　執行猶予なんですか。

太一　しかも、俺、（家で暴れただけだから）略式（罰金）で出れると思ったのよ、は、（実際はそう）じゃなかったからな。

――　はー。

太一　意味わかる？しかも最近もまた、みーとぅんだ〔夫婦〕喧嘩やって。

――　みーとぅんだ〔夫婦〕？

太一　おやっくわーよ〔親子よ〕。

――　おやっくわー〔親子〕ってなんですか？すいませんうちなーぐちわからなくて。

太一　みーとぅんだーって言ったら、夫婦げんか。

――　夫婦げんか、はい。

太一　そして、夫婦げんかで。

――　警察沙汰と。

太一　電話して、あれ（奥さん）が（警察を）呼びよったのよ。夫婦げんかで、奥さんが通報しよったから、もう終わりだと、俺、（当時は）執行猶予の身分だったから[18]。

――　はいはい。

太一　はっ、訴えられるんだ、俺、ぶち込まれるよ、はっきり言って、知念（にある刑務所）に、わかるでしょ、刑務所に。

――　行かなあかんですよねえ。

太一　知念（刑務所）に、あそこさ、あれになって（執行猶予取消になって）行ったから、「は、おまえ、まさかだろー、嘘だろ」って言ったけど、けどこんなって、（奥さんは通報するよって）自分の考えを突き通しよったのよ。

場面6

続いて、太一が離別した元嫁や子どもについて語る場面である。

（ヤンキーうちなーぐち）

太一　ふらーあらんしー、はっきいね。

――　気、強い方ですねえ（笑）。

太一　とぅじ、わーのかめーたとぅじもきーちゅーさーったんばよ。

太一　でーじやたんと、やしが、わらばーはわらばーやくって、この後、ばんないすんど、子どものためになんでもやる。ねえ。

――　うん。

太一　そのぐらいの気持ちはでーじある。審判でも何でも。

――　はい、はい。

太一　でーじなはんど、しにあるー。

（日本語）

太一　（俺は）物事の善悪がわからない人ではないし、はっきり言ってね。

――　気、強い方ですねえ（笑）。

太一　嫁、俺をめとった嫁も気が強かったんだよ

太一　大変だったんだよ、だけど、子どもは子どもだから、この後、一生懸命に生きるよ、（俺は）子どものためになんでもやる。ねえ。

――　うん。

太一　〈子どものために努力する〉そのぐらいの気持ちは強く持っている。審判（を

18 この時、太一は執行猶予中だったので、これが事件となれば取り消しとなり、刑が執行される状態にあった。

通じて、離婚後にどんなに不利な条件）でも何でも。

―― はい、はい。

太一　とっても強い気持ちは持ってるよ、とてもある。

場面7

太一と数時間にわたり飲んで、その後、繁華街に向かおうとする場面である。キャバクラ街であるC街で、太一は過去にある店で暴れたことがあった。それから、彼はC街では入店を断られることが多かった。実際に彼とC街に繰り出すと、普段は執拗に誘ってくるキャッチが、誰も彼に声をかけることはなかった。

（ヤンキーうちなーぐち）

太一　わったー、しっちょーのみーで安く入れるよ。

―― はい。

太一　でーじうしえてる、C街よ、C街、わーが来たら、うん、変な顔するよ。しかんでるよ。はっ、わーが来てるば、じらー。やむんど。

―― C街ですか。

太一　うん、うかさいはずよ、しなされるどー。

（日本語）

太一　俺たち、なじみの飲み屋で安く入れるよ。

―― はい。

太一　とっても調子に乗ってる、C街よ、C街、俺が来たら、うん、変な顔するよ。（俺のことを）ビビってるのよ。「はっ、あいつ[19]が来てるのか」みたいな。懲らしめてやるよ。

―― C街ですか。

太一　うん、〈腹立つけど、逆に〉うけるよ、（あいつら）ただじゃすまないからな。

5.2　上地の出所祝いパーティ

上述の太一と２人で飲んだ翌日、上地が拘置所から解放された。その日に、仲里のアパートで、太一、仲里、上地、私で、上地の出所を祝うパーティを開催し、泡盛を飲み交わした。以下はその際のやりとりである。

---

19 この「わー〔俺〕」はキャッチによる言葉なので、「あいつ（＝太一）」となる箇所だが、太一は「わー」と表現している。

場面8

刑務所経験のある太一と、上地がその経験について語り合う場面である。

（ヤンキーうちなーぐち）

上地　木曜日と金曜日、そばの日とカレーの日があるんですよ。

仲里　たまにはこんなのも出してくれる？

太一　で、またあれやーばんよやー。お金がある人に限って、注文もできるばーよ。

上地　弁当の注文できます。

太一　要は、かつ丼とかーて。

仲里　はーや。

上地　生姜焼き弁当と、とんかつ弁当。

太一　一応、あっちからのご飯もありーの弁当もみたいのだろ？

――　ふーん、そうなんだ。

上地　でも味はずっと一緒っすよ。うすいっす。千切りとか出てくるんで、めっちゃおいしくないっす。もう硬いです。

仲里　じゃあ、お金がもし一緒に入ってたとするやし、やー、そしてから、じん、お金がある人だけ、こんなのまーさぬーたのむさー。でもその時、食べる時、一緒の部屋だろ。

上地　一緒の部屋です。

仲里　とぅーしーぐわーけーならんば？

太一　あらんどー。やくとぅ、あれやし。どぅーちーがーみーならんやし。

仲里　あー、分けてくれるば？

太一　ううん、分けんばーよ、あしどーみで、ゆんたくとかするさー、ずっと暇やし、「なにやったのー」とか、これからすとやあ、「なにしてから捕まったのー」とか、なあ。

仲里　やーは絶対、殺しただろ。むるぶーちくわーてか。

上地　（笑）[20]

太一　じゃないばーよ、わー、最初行った時に、ほ、薬中にとぅんまじゅんだったばーよ、あしばーふーじーのと一緒だから、最初。

仲里　しーじゃーな？

太一　かーましーじゃー、ヤマトのやくざだったばーよ。でーじ頭きれてるわけよ。

上地　ヤバいっすよねえ。

（日本語）

上地　木曜日と金曜日、そばの日とカレーの日があるんですよ。

---

20 上地は流れのなかで笑っており、ここからは先輩たちの言葉をしっかり理解できていることがわかる。

仲里　たまにはこんなのも出してくれる？

太一　で、またあれなんだよなー。お金がある人に限って、注文もできるのよ。

上地　弁当の注文できます。

太一　要は、かつ丼とかなら。

仲里　（驚いて）へえ。

上地　生姜焼き弁当と、とんかつ弁当。

太一　一応、あっち（刑事施設）から（提供される）ご飯もあって、弁当も、（弁当）あるんだろ？

――　ふーん、そうなんだ。

上地　でも味はずっと一緒（同じ）っすよ。うすいっす。千切りとか出てくるんで、めっちゃおいしくないっす。もう硬いです。

仲里　じゃあ、お金（を持っている人）がもし一緒に入っている人がいたとすると、おまえ、注文してからお金を持っている人だけ、こんなおいしいものを頼むんだね。でもその時、食べる時、一緒の部屋で食べるんだろ。

上地　一緒の部屋です。

仲里　分けてくれよみたいに言われないのか？

太一　違うよー。だから、あれだよ。ひとりだけ食べるわけにはいかないだろ。

仲里　あー、分けてくれるのか？

太一　ううん（否定）、分けないよ、暇しているのかって（流れで）、おしゃべりとかするさー、ずっと暇やし、「なにやったのー」とか、これからするとよ、「なにしてから捕まったのー」とか（話すんだよ）、なあ。

仲里　おまえ〈みたいな暴れん坊〉は絶対、人殺しと同室だろ。全部食べたのか。

上地　（笑）

太一　そうじゃないんだよ。俺、最初行った時に、ほ、薬中（薬物中毒者）と同室だったのよ、暴力団らしき人と一緒だから、最初。

仲里　年上な？

太一　だいぶ年上、ヤマトのやくざだったのよ。とっても頭の回転がはやいわけよ。

上地　ヤバいっすよねえ。

場面９

場面８と同様の場面である。

（ヤンキーうちなーぐち）

太一　わーの隣の部屋のおとーよ。でーじおかさいのがいたばーて、やー。おじいだばーてや、「おーい」とか、検事、警察官とかも、こんなあれなんか呼ぶ。「おい、俺、もう死んじゃうぞう」とか。

一同　(笑)。

太一　もう年いってるから、「俺、捕まれ、お願い」じらー、「なにもやってない、やってない」じらー。

上地　自分がいた時、80の80のおじちゃんがいたんですよ。かわいそうで出してあげた方がいいんじゃないかねえって思う。

太一　「俺はここで死んじゃうのかー」とか、ちゃーあびーよ。(笑)

上地　ほんとヤバいっすよねえ。

太一　おかさいよなあ。

仲里　えっ、だから、刑務所から、出たいっていう、思うってこと自体が、要は本当は人間の心もってるばーよ。ルンペンとかホントに自分なくした人間っていうのは、外にいる世界よりもあっちにいたら3、3食付くわけよ、あんとぅくとぅ、くんばいばよ。外に出たいって思っている時点でいいばーよ。

太一　じゃない。普通だったらーて、えー仲里、思うけど。ほっ、わったーとかこんなって友だち、仲間いるさあ。いるやし。だからこんなってから話するさ。ふ、あったー、こんな友だちもいないから、ルンペンするの。いつも孤独で余計さびしんだはず。

仲里　で、いじいれいがあれやし。

太一　くまってから、ほー、まだ警察官とかがコミュニケーションとったり、なんかご飯持ってきてくれたりしたら、これなんかとでもちょこっとでも話できるさ。こんだけでも幸せと思うような気持ちになってるくらいまで、落ちてるばーよ。

上地　自分、3日間ぐらい、ホームレスと一緒だったんですけど。言葉がわからないっすよ。話ができなくて、ずっと壁みてずっとこんなって、ずっともうずっと、物考えてるんですよ。

仲里　やーも、あっち入ってるから、ちょっとは気持ちは変わってるはずよ、絶対外に出て、やっぱあっちにいるよりは外に出てきた方がいいと、今までは要はこんなってやってるさー。

太一　ふるあしびーて。

仲里　ふるやあしびーしてから、だからふるやあしびーして、要はなんて言うば、仕事とかゆくってみーみとかもこんなのとかも、人間ってあるわけやし。でも仕事よりもきついもんがあるもんやっさーみたいな。

上地　はい。

仲里　仕事に出てても、要は人間関係があるから、きつい仕事をやってるけど、たまには煙草吸ってみんみしてから会話はあるさ。

上地　はい。

仲里　「あっちからやりましょう」と。おうちにずっとくまってるよりは、やっぱこんなって人と話してる方はいいさーね。

上地　はい。

（日本語）

太一　（刑務所にいた時の）俺の隣の部屋のおじさんよ。とっても変な人がいたのよ、おまえ。おじいさんなんだけど、「おーい」とか、検事、警察官とかも、こんなあれなんか呼ぶ（のよ）。「おい、俺、もう死んじゃうぞう」とか。

一同　（笑）。

太一　もう年いってるから、「俺、捕まえて、お願い」って感じで、「〈俺は〉なにもやってない、やってない」みたいな（こと言ってるのよ）。

上地　自分がいた時、80の80（歳）のおじちゃんがいたんですよ。かわいそうで出してあげた方がいいんじゃないかねえって思う。

太一　「俺はここで死んじゃうのかー」とか、ずっと叫んでいたよ。（笑）

上地　ほんとヤバいっすよねえ。

太一　おかしいよなあ。

仲里　えっ、だから、刑務所から、出たいっていう、思うってこと自体が、要は本当は人間の心（を）もってると思うぜ。ルンペンとか本当に自制の効かない人間っていうのは、外にいる世界よりもあっち（刑務所）にいたら３、３食付くわけよ、こんな環境だから、また（刑務所に）戻ってくるわけよ。外に出たいって思っている時点でましだと思うぜ。

太一　そう（思う）だろ（同意）？普通だったらよ、えー仲里、思うけど。ほっ、俺たちとかこんなふうに友だち、仲間いるさあ。いるだろ。だからこんな風に話するさ。ふ、あいつら、こんな友だちもいないから、ルンペンするの。いつも孤独で余計さびしんだと思うぜ。

仲里　で、いいたとえがあれだよ。

太一　刑務所にぶち込まれてから、ほー、まだ警察官とかがコミュニケーションとったり、なんかご飯持ってきてくれたりしたら、これなんかとでもちょこっとでも話できるさ。こんだけでも幸せと思うような気持ちになってるくらいまで、落ち込むんだよ。

上地　自分、３日間ぐらい、ホームレスと一緒だったんですけど。言葉がわからないっすよ。話ができなくて、ずっと壁みてずっとこんな風に、ずっともうずっと、物考えてるんですよ。

仲里　おまえも、あっち（拘置所に）入ってるから、ちょっとは〈やりなおそうというように〉気持ちは変わってるんじゃないか、絶対外に出て、やっぱあっちにいるよりは外に出てきた方がいいと、今までは要はこんなって（悪さを）やってるけど。

太一　遊びほうけて。

仲里　遊びほうけてきたから、だから遊びほうけして、要はなんて言うば、仕事とか

で休憩したりする時間とかも、こういうことって、人間ってあるわけだろ。でも仕事よりもきついものがあるんだなーみたいな。

上地　はい。

仲里　仕事に出てても、要は人間関係があるから、きつい仕事をやってるけど、たまには煙草吸ったりしてから会話はあるさ。

上地　はい。

仲里　「(建築現場で) あっち (の作業) から (一緒に) やりましょう」と。おうちにずっと閉じこもってるよりは、やっぱこんなって人と話してる方はいいだろ。

上地　はい。

場面10

場面８と同様の場面である。

(ヤンキーうちなーぐち)

太一　わかるだろ上地、あまにいたらなんかこんなって、しょっちゅう布団とかも朝からたたむさー。こうやってから。

上地　はい、朝からですよね。

太一　掃除もするさー、こんなのもやるようになるあんに。

上地　「後面、行進、異常なし」とかって、こんなしてじゃないですか、やばいっすよね。

太一　こんなのもやるようになるあんに、ポケットとか調べられるばーよ。

上地　毎日、ポケットとか点検されるんですよ。

仲里　毎日？

上地　朝９時と、夕方の6時ぐらいです。

仲里　ちびるあなも見せるば？

太一　ううん、それまではじゃない。

上地　針金とか持って、なんかやる人いるじゃないですか、あの人のためにチェックするんですよ、こんなって、ぴー。

太一　だから、ぜんぶ調べられ。

仲里　ちびるあなーまでは見せないだろ。

上地　はい。

太一　あてぃーめーやよや、だからこんなって調べるからよ。

上地　これ誰のズボンですか？

仲里　わーの。

上地　打越さん、行きましょう。

仲里　えっ、上地、刑務所慣れしてるか、ちゃー拭きーど、うり、うりうりうりうり。ちゃー拭きー。

太一　わーしょっちゅうこんな。
上地　掃き掃除終わったら、もう拭きますよね。
太一　畳もこんなして拭くさーや。

（日本語）
太一　わかるだろ上地、向こう（拘置所）にいたらなんかこんな風に（揃えて）、しょっちゅう布団とかも朝からたたむさー。こうやってから。
上地　はい、朝からですよね。
太一　掃除もするよな、こんなのもやるようになるんじゃない。
上地　「後面、行進、異常なし」とかって、こんな風じゃないですか、やばいっすよね。
太一　こんなのもやるようになるだろ、ポケットとか調べられるんだよ。
上地　毎日、ポケットとか点検されるんですよ。
仲里　毎日？
上地　朝９時と、夕方の6時ぐらいです。
仲里　お尻の穴も見せるば？
太一　ううん、それまではしない。
上地　針金とか持って、なんかやる人いるじゃないですか、そんな人のためにチェックするんですよ、こんなって、（金属探知機で）ピー。
太一　だから、ぜんぶ調べられる。
仲里　お尻の穴までは見せないだろ。
上地　はい。
太一　あたりまえだろ、だからこんな風に調べるからよ。
上地　これ誰のズボンですか？
仲里　俺の。
上地　打越さん（も刑務所に）、行きましょう。
仲里　えっ、上地、刑務所慣れしてるか、（太一が刑務所で覚えたやり方で床を）しっかり拭いてるよ、ほれ、ほれほれ。めっちゃ拭くよ。
太一　俺いつもこんな。
上地　掃き掃除終わったら、もう拭きますよね。
太一　畳もこんな風にして拭くだろ。

5.3　慶太の「酒グセ」

2012年９月１日、旧盆の最終日だった。それぞれの地元でエイサーが行われ、太一、仲里、譲司、慶太の先輩らと私の5人はエイサーを見物し、その後、行きつけの居酒屋に向かい、３、４時間にわたり飲み続けた。親戚や地元のエイサー青年団から頼りにされる人びとにとっては旧盆最終日のこの日は忙しい日となるが、彼らには実家も地元の青年団からも声

がかからなかった。そのようなこともあり、慶太は深酒となり執拗に絡み続ける「酒グセ」が出てしまい、最終的には太一が激しく怒鳴り散らす展開となった。なお太一、慶太、譲司は格闘技の現役選手である。

場面11

向かった居酒屋で、かつて太一は暴れてしまい部屋の一部を破壊した前歴があった。ゆえに、私たちは賑やかな居酒屋の1階からは離れた2階の隅の角部屋の個室に案内された。そして、しばらくすると慶太の酒グセが出始めた。彼は自身が交際中の女性に仲里が関係をもったのではないかと言いがかりをつけて執拗に絡んだ。

（ヤンキーうちなーぐち）

太一　いつやんばー、9月の試合は？
譲司　23？
太一　何日か。
慶太　関係みーよ、わー強くなる。
太一　だから何日よ。
慶太　殺す。
太一　はあ。
慶太　殺したい。
太一　何日か。
譲司　23。
太一　23、誰とよ、ブラジリアン？
慶太　ブラジル。
譲司　あれ強いば、一応？
慶太　強いはずよ。
太一　負けらんけよ。
譲司　これウェイトとかも全部一緒やんば？
太一　あわすんじゃないか。なん契約か。63。はっ、何キロ？
仲里　誰よ。
太一　やーならんよ、わーよ。
譲司　やー、やー（太一）は何でもいいんじゃないか。
太一　わーはん、わーはなんでもいいばーよ、本当に。体重関係ないんばーよ。
譲司　やー、慶太怒んな。
慶太　イライラするマジで。
太一　いいよ、今日は男で飲んでるんだのに女入れるな。わったーだけで飲んでるのに、やー女入れたらおもしろくないよや。

慶太　ほんとな。
太一　だーるだろ、普通に、じゃあ最初からあまで飲みに行けよーって話よ。
慶太　やってるんだろ。やったー会ってんだろ。絶対。絶対殺したいやっさ。
太一　顔も見たこともないよやー、名前すらわからん、わったー女もあたらんのに。
慶太　本当か。
太一　本当よ。

（日本語）
太一　いつなのか、9月の（格闘技の）試合は？
譲司　23（日か）？
太一　何日か。
慶太　関係ないだろ、俺、強くなる。
太一　だから何日よ。
慶太　（交際相手を）殴りまわす。
太一　はあ。
慶太　ぶん殴りたい。
太一　何日か。
譲司　23。
太一　23、誰とよ、ブラジリアン？
慶太　ブラジル。
譲司　あれ強いのか、一応？
慶太　強いらしいよ。
太一　負けるなよ。
譲司　これウェイトとかも全部一緒なのか？
太一　あわすんじゃないか。なん契約か。63。はっ、何キロ？
仲里　誰よ。
太一　おまえじゃないよ、俺よ。
譲司　おまえ、おまえ（太一）は（無差別級だから体重は）何でもいいんじゃないか。
太一　俺は、俺はなんでもいいのよ、本当に。体重関係ないからよ。
譲司　おい、慶太怒んな。
慶太　イライラするマジで。
太一　いいよ、今日は男で飲んでるんだから、女入れるな。俺たちだけで飲んでるのに、おまえ女入れたらおもしろくないだろ。
慶太　ほんとうか。
太一　そうだろ、普通に、じゃあ最初から向こう（飲み屋）に飲みに行けよって話よ。
慶太　やってる（関係をもった）んだろ。おまえたち会ってんだろ。絶対。絶対殴り

まわしたい、あー。

太一　（女性の）顔も見たこともないよ、名前すらわからん、俺たち女と遊ぶことさえないのに。

慶太　本当か。

太一　本当よ。

場面12

かつて、慶太は太一と喧嘩した時に、鼻を殴られ骨折したことがある。慶太はそのことを思い出し、太一に謝るように求めただした。

（ヤンキーうちなーぐち）

慶太　あびらんけ、ふらーやー、どぅ、これこんなのしなしんど。

太一　えっやー、あん時のあれいるさ、電話来てさばーて最近、あーって、あん時の。

慶太　ぬーがやねん。

太一　言いよったばーて、その後から着信拒否よ。

慶太　えっ、あびとーけど。これ、わんコンパ全部根こそぎもってきてから、これに、なんか、これあれみれんばー、わかるでしょ仲里。あれみてから仲里のせいにしたばーよ、ぬーがあちらんけ、ふらーや。あびとー、えー、鼻ぴくーして怒ってでてるばーよ。でもちょっと謝れ、俺に。１回くらい謝れ、１回くらい謝れ、やー、俺に、じゃ、骨折やし。

譲司　やー、謝っとけえ。

慶太　骨折しに、ふらーや。やー、骨折した時、やーこれまぎーの時や、謝ったあれあるやし。骨折のあれ謝れ一応、俺に1回くらい謝れ。

太一　やー、ごめんなあほんとなあ。しに。

慶太　「うーん」って、言うかふらー、言うかふらーや、わー言えるかぼけえ。

太一　や、てーげー一応は、今のはよかった。今のあれうまかったやっさー。

慶太　ふらーや、ふらーや、あいんなやふらー。

太一　やー、今のはうまかったぜ(笑)。わーこんなって言いよったからこれも、のって。

慶太　ふらーが。

譲司　やったーうるさくない？

（日本語）

慶太　うるさい、バカ野郎、俺、これ、こんなんだったら、しばくぞ。

太一　おい、おまえ、あの時のあれ（女性）いたさ、電話来てたのよ。最近、「あー、あの時の」って（言ってたさ）。

慶太　なんなんだよ。

太一　言ってきたのよ、その後から着信拒否よ。

慶太　えっ、(勝手に言ってるけど) うるさい。これ (太一)、俺のコンパ全部根こそぎもっていって (参加した女性と関係をもって)、これに、なんか、これあれ、みれないよ、わかるでしょ仲里。あれみてから仲里のせいにしたのよ、なんでーって吠えるな、あほ。吠えるな、おい、(俺は) 鼻ぴく (鼻を骨折) して怒っているんだよ。でも (太一は) ちょっと謝れ、俺に。1回くらい謝れ、1回くらい謝れ、おまえ、俺に、じゃ、骨折したんだよ。

譲司　おまえ (太一)、謝っとけえ。

慶太　骨折して (強調)、バカか。おまえ、骨折した時、おまえこれ (鼻) は腫れて大きくなった時に、謝ったことあるか。骨折のあれ、謝れ一応、俺に1回くらい謝れ。

太一　おまえ、ごめんなあほんとなあ。本当に (悪かった)。

慶太　(ノリツッコミの体で)「うーん」って、言うか、あほ、言うかバカ野郎、俺、言えるか、ぼけえ。

太一　おまえ、なかなか一応は、今の (ノリツッコミ) はよかった。今のあれ (ボケ方) うまかったなあ。

慶太　バカ、バカたれ、あんなふうに言うのかよ、バカ。

太一　おまえ、今のはうまかったぜ (笑)。俺こんな風に言ったからこれも、(調子に) のって。

慶太　バカが。

譲司　(からかう感じで) おまえたち、うるさくない？

場面13

徐々に酒グセの出始めた慶太を、仲里と譲司が説得する場面である。

(ヤンキーうちなーぐち)

慶太　死なしたい。

仲里　やーや、こんだけやー、るーがちゅーさんむんや。やーふらーやー。ただいなぐーちゃーやー、でーじやし、やーがや。ちっぽけに見えてくるよやー。

慶太　ちっぽけなのに。

譲司　なにやーこんなって荒れる、また。

慶太　ばれてるって。

(日本語)

慶太　ぶん殴りに行きたい。

仲里　おまえ (慶太)、こんだけ、自分が強いのによ。バカだな。ただの女のことで

よ。大変なことになるぞ。おまえがちっぽけに見えてくるよ。

慶太　ちっぽけなのに。

譲司　どうして、おまえは、こんなふうに荒れる、また。

慶太　ばれてる〈おまえが関係をもったことはわかっている〉って。

場面14

酒グセが出て仲里に絡み続ける慶太に対し、最終的に太一はビールジョッキを机に叩きつけ、胸ぐらをつかみ殴りかかろうとした直後の場面である。なんとか、その場にいたメンバーで制止し、落ち着かせることができた。後に、太一は自身がキレたようにふるまい、慶太を驚かせて、落ち着かせることで事件に発展することを防ごうとしたのだと説明した。

（ヤンキーうちなーぐち）

譲司　じゃないさ、要は浮気さ。

太一　これの言い分は、逆に他の浮気相手もいると、それを「おまえがやったんじゃないかー」って、仲里にふりよったからよ。「やー、本当なー」って言いよったさ。

譲司　ううん、やったーだろ。

太一　やったー、わーもよ。やーがほんとに、「やーも遊んでるんじゃないか」と、仲里にも言いよったし、言いよったからよ、わーこれでキレた。「わったーどぅし、あびとんば」、ただでさえシマのしーじゃーやし、しーじゃーぬーなあびとん、はっきりいってまわりむるしーじゃーやし、○○（名前）と、三越、いつこし、でもしーじゃーさ、こんなし酒癖みせるくらいやしならんど。だからわざと、もうこれ以上だったら、誰もとめれんやっさーってから、ばんみかしてしかばしただけの話、本当だったら、やってるよもう、だから１回はしかばしただけの話よ。で、まじで今日はとめよう。絶対、1000円も貸せないで。

――　はい、わかりました。

譲司　俺も思う、あれ行ったら傷害。

太一　行ったとしても傷害事件で捕まる。

（日本語）

譲司　（そう）じゃないさ、要は（交際相手の）浮気（を慶太は疑っているわけ）さ。

太一　これ（慶太）の言い分は、逆に他の浮気相手もいると、それを「おまえ（仲里）がやったんじゃないかー」って、仲里を疑ったからな。（仲里は慶太に）「おまえ、本当か〈俺を疑っているのか〉」って聞いてたから。

譲司　ううん、おまえたちだろ。

太一　おまえら、俺もよ。おまえがほんとに、「おまえも遊んでるんじゃないか」と、仲里にも言ってたし、言ったからな、俺はこれでキレた。「俺たち、友だちじゃな

いのか、言い争うな」、ただでさえ地元の先輩だろ、先輩となんで言い争ってんだ、はっきり言ってまわり全員年上じゃないか、○○（名前）と、三越、いつこし、（外の人間）でも年上だろ、こんな風に酒グセみせるくらいならだめだよ。だからわざと、もうこれ以上だったら、誰もとめれなくなるなあと思ってから、机叩いて驚かしただけの話、本当だったら、やってるよもう、だから１回は驚かしただけの話よ。で、まじで今日はとめよう。絶対、（慶太がタクシー代としてせがむ）1000円も貸さないで。

―― はい、わかりました。

譲司　俺も思う、あれ（いま女性のところへ）行ったら傷害（事件になる）。

太一　行ったとしても傷害事件で捕まる。

場面15

慶太の酒グセが落ち着き、飲み会の終盤に尊敬する先輩について語り合う場面である。

（ヤンキーうちなーぐち）

仲里　あったーとか心が広いやし、だから要は人間がついていきたくなる人間やし。言っている意味わかる？

―― ホントに強い人間は、あれですよね。そんな強い強いしないっすよ。

仲里　要はわったーの身近な人間でいうと、○○にいにいど。

太一　ああー。

仲里　心技体やしあれ。心も強い、体も強い。

譲司　したたか喋ってるから。

仲里　だからわったーも、あの人のこと、こんなして言うけど、でーじ優しくてからこんなって言うけど、でもいない場でも敬いのあれで言ってる、あの人はホントにすごいんだよー。

太一　やさしいな、どぅしぐわーふーじー、やさしい。

仲里　そんなもんよ。

太一　「お願い練習付き合って」って言ったら、絶対本気で付き合ってくれるばーよ。

譲司　まじでな。

仲里　親身に思ってやってくれるからな、だから人の強さっていうのはどこにあるのかなーといったら、わーはこんなもんと思うわけよ、強い人間はごまんといるやし。あんし、プライドであれが最強やっさーと思ってたのがもUFCとか出たら殺されてるんばーよ。

譲司　あー。

仲里　上には上がどんどん出てくるさ。だからあれやんばーよ。しかも逆にくったーには逆にもっとこんな気持ちを持って欲しいな、俺は。

譲司　あー。

仲里　やー、これが一般ピープー殺すのとか、簡単ぐわーやし、はっきり言って。

譲司　やしが、これ、これ、太一もあれやし、わったーにはむるてーださんやし、「死なすど」って言ってもしなさんけーる。

仲里　この辺のごろつきふうじいので終わるなよーって話よ。

譲司　なあ。

仲里　普通の一般ピーポーやーいれー、あてぃいめーこれが勝つのは当たり前の話よ。

（日本語）

仲里　あいつら（後述の先輩たち）心が広いだろ、だから要は人間がついていきたくなる人間だろ。言っている意味わかる？

――　ホントに強い人間は、あれですよね。そんな（自分から）強い強いしないっすよ。

仲里　要は俺たちの身近な人間でいうと、○○兄さんよ。

太一　ああー。

仲里　心技体だろ、あの人。心も強い、体も強い。

譲司　（こんな俺たちにも）よく話してくれる。

仲里　だから俺たちも、あの人のこと、こんな風に言うけど、とっても優しくてからこんな風に言うけど、でもいない場でも敬いのあれ（気持ち）で言ってる、あの人はホントにすごいんだよ。

太一　やさしいな、親友みたいにやさしい。

仲里　そんなもんよ。

太一　「お願い、（格闘技の）練習付き合って」って言ったら、絶対本気で付き合ってくれるしよ。

譲司　まじでな。

仲里　親身に思ってやってくれるからな、だから人の強さっていうのはどこにあるのかなーといったら、俺はこんなもんと思うわけよ、強い人間はごまんといるのよ。あんなに、プライド（格闘技大会）であれが最強だなと思ってたのがもUFC（格闘技大会）とか出たら殺されてるんだよ。

譲司　あー。

仲里　上には上がどんどん出てくるな。だからあれなんだよ。しかも逆にこいつら（太一と慶太）には逆にもっとこんな気持ちを持って欲しいな、俺は。

譲司　あー。

仲里　おい、これ（太一）が一般人、ノックダウンさせるのとか、簡単だろ、はっきり言って。

譲司　だけど、これ、これ、太一もあれだし、俺たちには誰も手を出さないだろ、「殴るぞ」って言っても殴らないよ。

仲里　この辺のごろつきみたいなので終わるなよーって話よ。
譲司　なあ。
仲里　普通の一般人なんて、あたりまえにこれ（太一）が勝つのは当たり前の話よ。

場面16

慶太の酒グセについて、太一らはいつものことだから、気にしないと理解を示している場面が続く。

（ヤンキーうちなーぐち）
仲里　でもあれ、いーたらこんなだからよ。
太一　かしまさいところがある。
仲里　あんまさいのはあんまさいばーよ。
太一　だから今日も、わーエイサー見てるときにあんなしてからやってたから、はっし始まってるよや、今日はあんまさいってわかってたばーよ。
譲司　あれ、電話してたか、あったー。
仲里　ううん電話とかじゃない。要はもうあれがいーた時わかるばーよ。ぬーがら、ううん、「わったー、まきらんどー」とかなんかこんなの言うばーよ、ぱっくない。
太一　ぬーがのーとか、次は絶対まきらんどとか、ぬーが言ってきよったばーよ、わったーエイサーして、ふらー、エイサーやあならんど、逆にわったーがわらわりてぃてきたーか。そうがさんいきょーた。
譲司　やしが、わーがいたとおりＡ地区がしにそうがさい。
太一　上等だったな。
仲里　上等だな。
譲司　あれはやっけーど、あったー。

（日本語）
仲里　でもあれ（慶太）、酔っぱらったらこんなふうになるからよ。
太一　面倒なところはある。
仲里　大変なのは、大変なんだけど。
太一　だから今日も、俺、エイサー見てる時に、あんなふうに酒グセが出始めてたから、あー〈いつものが〉始まってるな、今日は面倒だなって、わかってたのよ。
譲司　あれ、電話してたか、あいつ。
仲里　ううん、電話とかじゃない。要はもうあれが酔っぱらった時、わかるのよ。なんか、ううん、「俺たち、負けないぞー」とか、なんかこんなのつぶやいていたのよ、何回も。
太一　（喧嘩をうる感じで）なんかーとか、次は絶対負けないぞとか、何か言ってき

たのよ、俺たちエイサーしても、(誘われないから) エイサーできないだろ、逆にわったーが (エイサーしてる奴らに) 笑われてきたか。(それなのに、あいつらはエイサーを俺たち抜きで) すごい盛り上がってた。

譲司　だけど、俺が言ったとおりA地区がとっても盛り上がってた。

太一　上等だったな。

仲里　上等だな。

譲司　あれはやばかったな、あいつら。

6　ヤンキーうちなーぐちの動態

5節では彼らが話す言語について具体的にみた。続いてここでは、それらが用いられる場面、集団をおさえながら、ヤンキーうちなーぐちを用いることの地元社会における動態について述べる。

6.1　創造されるヤンキーうちなーぐち

まずヤンキーうちなーぐちは創造される言語である。

5節のやりとりは飲酒をともなうものであり、言い間違いもあるが、それでも既存の言語体系に位置付けることの難しい表現や活用は残る。例えば、場面13で仲里が「ぬーがやねん〔なんなんだよ〕」と述べるが、これはうちなーぐちの「ぬー〔なに〕」と関西弁の「やねん」が合成されたものである。また場面2で太一が話す「いちむどやー」というううちなーぐちは、行ったり来たりする人という意味であるが、彼らの間では刑務所に入り浸る人 (日本語でいう「懲役太郎」) という意味で流用されていていた。この他にも、意味のあやふやな表現や活用が散見される。これは沖縄のヤンキーの若者全般に通用する表現、活用ではなく、同席した特定のメンバーでのみ交わされるものである。

フィッシュマンは、以下のように述べる。

> (a) 中流階級および上層中流階級は下層階級より、言語および社会的行動において、より大きな目録を有する;(b) 下層階級は、上層階級より――地域的、民族的、宗教的、人種的等に――よりばらばらのままでいる傾向にあり、従って、上層階級のことばの場合より、下層階級のことばにはずっとずっと非連続な変異が保存される。(Fishman, 1972=1974: 79)

ここで述べられているように、彼らはその集団内でのみ通用する非連続で断片的な言語を話している。

バジル・バーンステイン (Basil Bernstein) は、労働者階級の子どもたちの言語コードに注目し、学校を介した再生産論を展開した。彼は中間階級の子どもたちは文脈独立的な「精密コード」を用いるのに対し、労働者階級の子どもたちは文脈依存的な「制限コード」

を用いることを指摘した。彼は、そのコードの違いが学校を通じた階級の再生産に大きく効いていることを解明した（Bernstein, 1971=1981）。

それに対して、本稿の沖縄のヤンキーの若者たちの言語は、「局所コード」とでもいうべきものである。それは少人数の仲間による、その場、その時にやりとりされる言語コードである。それは、家族や工場、労働者階級といった限定的ではあるがまとまった文脈を前提とした制限コードとは異なり、より断片的で流動的なコードである。しかしそれは理解不可能なものではなく、彼らの間ではしっかりと意思疎通のとれる言語コードであり、また彼らの生活、職業選択を背景にして現在も実践的に創造されているものである。本稿では、学校に適合的な精密コードや工場でやりとりされる制限コードではなく、地元の先輩、後輩や建設現場で飛び交う局所コードが存在していることについて、具体的に描写した。このように彼らにとって、言語は辞書や目録にもとづいて習得するものではなく、日々の生活でのやりとりを通じて、既存の言語を合成、流用しながら、創造していくものであることがわかる。

6.2 ヤンキーうちなーぐちの機能

続いて、ヤンキーうちなーぐちの機能について、それが用いられる社会的体系に注目して述べる。上の３つの場面は、それぞれ（1）先輩である太一と私による会話、（2）先輩である太一、仲里に加えて、後輩の上地、そして私の4名の会話、（3）先輩である太一、譲司、仲里、慶太、そして私の会話であった。私は調査対象社会での役割はパシリ（雑用係）であり、地位は後輩の位置付けだった。１つ目の場面では、先輩である太一がヤンキーうちなーぐちを、理解の追いつかない私に容赦なく語りかけている。ここからは彼の生活言語がヤンキーうちなーぐちであることがわかる。また２つ目の場面では、太一たちの後輩にあたる上地は、ヤンキーうちなーぐちどころか、うちなーぐちさえ話さない。彼は、同級生とのやり取りでは強烈なヤンキーうちなーぐちを話し、聞くことができるにもかかわらず、先輩たちと話す場面ではやや丁寧な日本語で話す[21]。彼は先輩と話す場面では、自称詞として「自分」を使う。追加調査で、彼は同世代や後輩には「わー〔おまえ〕」を使い、先輩への他称詞はなく、「○○さん」や「○○にーに〔兄さん〕」を用いるという[22]。また上地は先輩と話す際には、語尾に「っす」や「っすよ」をつけて、敬いの意味を込めている。

このように、ヤンキーうちなーぐちは、それを話す者がその集団内で先輩であったり、地位が高いことを誇示するために用いられる言語といえる。

---

21 彼のうちなーぐちの能力は、沖縄の舞台役者である仲田幸子の喜劇を字幕なしで聞き取ることができるほど高いレベルである。またうちなーぐちにも敬語表現は存在するが、彼は日本語でそれを表現する。

22 上地によると、先輩に向かって「やー〔おまえ〕」と呼ぶことはありえないし、もし使えば「誰に物言ってるば」と激怒され、間違いなくトラブルに発展する表現のようである。

同様のことは、2012年ごろに存在した、沖縄の暴走族専用ホームページの掲示板でも確認できた。そこでは暴走族が出動する際の事前告知や、それを見物する者たちによる批評が書き込まれていた。そこの書き込みをめぐってはよく激しいやり取りに発展したが、そこで書き込まれる言葉が強烈なヤンキーうちなーぐちであればあるほど、ヤンキーであることを示し相手を圧倒した。逆に日本語で書き込む者は「へんなー（変な奴）」とのレッテルを張られ、バカにされる対象であった。匿名のインターネットにおいて、うちなーぐちのレベルやそれが示す地域で、ヤンキーであること、先輩であることを誇示していたのである。

そのような関係と地位を表す言語は、それを用いる状況を見誤るとトラブルに発展する。2008年に実施した、建設業の参与観察の際に生じた出来事を調査記録から振り返る。

現場での作業を終え、この日は班長の裕太が運転しながら事務所へ帰った。現場の駐車場の出口を出ようとしたところ、出口の警備員が我々に注意しに近寄ってきた。出口は右折禁止になっているが、裕太が右折しようとしたために口論となった。裕太は朝会にほとんど欠席のため、その連絡事項を知るわけがない。左折を指示する警備員にむかって、「そんなの知らん。今（他の車が右折して）行っただろ、みんな右折してるだろ」と返す。警備員も「朝会で確認してるように」と応戦してきた。裕太は、「聞いてない。あれ、車来てる。どかんと」と無理やり右折した。

翌日も裕太の班は同じ現場の担当となった。昨日、出口の警備員と右折禁止をめぐって口論となった件で、沖組の現場班長が現場監督に呼び出しをくらい注意されたようだ。もちろんこのようなことはよくあることで、現場班長も裕太の代わりに現場監督から注意を受けて、実際には裕太に注意することなく事は収まる。しかし、この日はそうはいかなかった。そのことを知った裕太は、仕事を中断して直接出口に向かって行った。しばらくして、なぜか私が現場班長に呼ばれて出口の裕太と警備員のところに行けと指示を受けた。なぜ私なのか、なにをするのか、まったくわからないまま、出口に行くと、裕太が血相をかえていた。「帰るから車出して」と言われ、私は「はっ、はいっ」と返事し、車を準備した。私は助手席に乗り、裕太が運転して、現場を去ろうとした。出口付近で言い争った警備員に車で接触寸前まで近づき、「おまえが帰るとかいうから、俺が帰ればいいんだろ。もう俺この現場こんから上に言うなよ」と裕太。警備員は無視していた。車はそのまま国道を南下した。

その日の夕方、やっと今朝のことが聞ける雰囲気になっていたので改めて聞いた。「（警備員が俺の）態度が悪いっていうから、俺のどこが態度が悪いば？」って裕太があくまで「確認」をしたようだ。その場に行くと、警備員が「いったー（おまえら）が右折禁止で右折するからだろ」と言ってきたから、裕太は「いったーって、誰にむかってもの言ってる？おまえこそ態度が悪いだろ」と言い返した。裕太は、ただ「確認」に行くだけだったがいつのまにか現場から帰ってたと言い、班のメンバーを笑わ

せてくれた。[23]

警備員が発した「いったー〔おまえら〕[24]」という言葉に、裕太は激高した。それは年下の警備員が年上の裕太に言い放ったこと、また建設業を下にみる態度が許せなかったからだった。

このようにヤンキーうちなーぐちは、上下関係を明確に表すという機能を併せ持つ言語である。日常的に用いることで、それぞれの関係性を何度も確認する機会となる。そしてそれは地元で生きるヤンキーの若者たちにとって、承認の基盤であり、また集団内の地位を安定化させる機能を果たした。そして、その安定した上下関係は、厳しい建設業界で働く際に有効なものであった。それゆえ、ヤンキーうちなーぐちを習得することは、建設現場で指示される言語内容がわかることに加えて、そこでの関係性を安定させ働きやすくさせる機能を果たした。これらの要因によって、ヤンキーうちなーぐちを習得することが建設現場で働く条件となっていた。

6.3 ヤンキーうちなーぐちの変化と困難

最後に、変化するヤンキーうちなーぐちとその困難について述べる。

言語行動が展開される社会的体系に注目する言語社会学は、社会的体系の変化にも焦点をあてる。

> 言語社会学のこの部分――記述的言語社会学（descriptive sociology of language）――は、「誰がどの言語（もしくはどの言語変種）を誰にいつ何のためにしゃべる（書く）か」という問いに答えようとするものである。（中略――打越）言語社会学のもう一つの部分――動的言語社会学（dynamic sociology of language）――は、「何が、言語使用と言語に対する態度との社会的体系の変化のさまざまな速度を説明するか」という問いに答えようとする。（Fishman, 1972=1974: 5）

6.2でヤンキーうちなーぐちを習得することで得られるヤンキーとしての誇りや地位を得ること、そして建設現場で働く条件となる機能をみた。フィッシュマンによれば言語使用は社会的体系とともに変容する。そのことを象徴的に示す事件が2017年の沖縄で起きた。

> 2017年9月、沖縄県読谷村のチビチリガマが少年らによって荒らされるという事件が起きた。器物損壊の容疑で逮捕されたのは4名で、沖縄県中部在住の16歳、18歳の

23 打越（2011）の一部を修正して再掲した。
24 上地によると、「いったー」は先輩に用いる他称詞として、「やったー〔おまえら〕」以上に用いてはならない表現のようである。

無職の少年と、17歳の型枠解体工の少年、そして19歳の休学中の高校生だった。千羽鶴は引きちぎられ、骨壺は破壊され、「平和」と書かれた額は叩き壊された。少年らがガマに侵入した動機は、「肝試し」と発表された。「肝試し」に加わった、他のメンバーからは、「やるな、やるな」と制止する場面もあった。[25]

この「やるな、やるな」という言葉は、暴走族や建設業の男性が生きる強烈な上下関係では、考えられないものである。そこで制止しようとする声がそもそも出てくること、そしてその制止に従わずに強行したことは考えられないのである。仮にこのようなことが生じるとしたら、先輩の指示によって後輩が無理やりにやらされたというパターンしかありえない。そして「やるな、やるな」という表現は、沖縄では通常、同級生の若者同士で用いられることが多い。同級生なので命令形であるが２回繰り返すことで表現を和らげている[26]。彼らの集団は16歳から19歳と幅があるにもかかわらず、まるで同級生のようなフラットな関係性であるかのようだった。

このように中学卒業後に進学も就職もしない若者や建設業に従事する者が、ここまでみてきたような上下関係を明確に示すヤンキーうちなーぐちを身に付けないにもかかわらず、彼らと同様の過酷な生活と仕事に投げ込まれている。1993年から20年近く沖縄の建設業の受注額は減少し続けた。また少子化も進行した。この期間には現場では人が余っており、新参者である若手が一人前の建設作業員と育つ環境は厳しくなっていた。

また建設業に10年近く勤めた中堅の従業員も、受注規模の減少に伴う労働環境の悪化により、離職者が続いていた。ここまで見てきたように、彼らは特定の先輩のもとで働く力を身に付けてきた。その過程でヤンキーうちなーぐちは有効に機能した。しかし、彼らが建設業を辞めても、コールセンターなどのサービス業、本土の製造業の期間工（キセツ）、また自営業は、ヤンキーうちなーぐちを生活言語とする彼らが就くにはハードルの高い職種であった。このように建設業界の変化に、彼らはその言語ゆえに翻弄されていた。

7　結語

暴走族、ヤンキーから建設業に就いた沖縄の若者がヤンキーうちなーぐちを話すことは、彼らの生活や仕事の文脈にてらしあわせれば、合理的な選択として理解できるものである。彼らは普段の生活や仕事の場面でうちなーぐちを用いる。それは学校で習う日本語とは大きく異なる言語であった。またうちなーぐち、なかでも彼らヤンキー独特のうちなーぐちを話すことは、自身がヤンキーであることや、地元で生活し働いていることを仲間集団に誇示することを意味した。また彼らの主な就職先である建設業の現場においては、年上の

25 打越（2017）の一部を修正して、再掲した。
26 もしこれが先輩による制止なら「（ドスの利いた）えっ」もしくは「さんけー（やめろ）」で十分である。逆に後輩から制止にもっていくとすれば、相当の言語運用能力が求められる場面である。

従業員からの指示はほとんどうちなーぐちであり、それを理解できないと働くことは難しかった。このようにうちなーぐちを用いるということは、ヤンキーとしての承認や地位を得ることであり、また建設業で働くための条件であった。

他方で、ヤンキーうちなーぐちを用いることは、彼らを地元の生活と仕事にはめ込み、そしてそこから抜け出すことを困難にした。建設業が右肩上がりの時代はヤンキーうちなーぐちを用いることで先輩たちとのコミュニケーションは深まった。言語が特定の場面で創造され関係性を表す機能を果たした。しかし沖縄の産業構造には製造業がほとんど存在せず、また上述したように1993年以降は建設業で厳しい状況が続いた。このような状況でヤンキーうちなーぐちを用いることの意味と機能も変わってきた。受注額も減り、少子化となったことで、中学卒業後に建設現場に定着できる若者が減り、うちなーぐちを習得する機会は失われた。これにより、ヤンキーうちなーぐちを習得しない、それは上下関係を基軸とするヤンキーの生活様式を身に付けていない、中卒無業者や建設作業員が溢れだしたのである。

また中堅の建設作業員は、建設業で働くために適合的で、地元の人間関係に特化したヤンキーうちなーぐちを身に付けることで、転職はより困難となった。建設業から製造業やサービス業への転職は、彼らの学歴だけではなく、彼らの話す言語も大きな障壁となった。沖縄のヤンキーの若者を建設業に向かわせたのも、また現在の状況をより困難にさせているのも、ヤンキーうちなーぐちが果たした役割は大きい。彼らの言語は生活や人間関係に根ざしている。それゆえ、言語は簡単に変えることはできない。言語は融通無碍に創造されるが、そのスピードは市場や就労現場の変化には追い付かない。このように彼らはその言語能力と言語環境によって、固有の困難を経験している。ただし、彼らの言語能力は、その困難の原因ではない。彼らの言語をめぐる実態の背景には、沖縄のいびつな産業構造があり、それを「戦後」から現在に至るまで放置していたことこそが問われなければならないのである。

最後に今後の課題を述べる。筆者は、本土で生まれ育ち、沖縄の大学に進学したが、そこでは彼らが話すような、うちなーぐちには接する機会はほとんどなかった。彼らが話すヤンキーうちなーぐちに接することができたのは、本調査を始めた2007年からである。また年に一回程度の通いの調査で、そのテーマも言語に絞ったものではなかった。そのような事情により、そもそも言語を忠実に記録するヒアリング能力も、またうちなーぐちについての体系的な知識も不十分である。今後は、うちなーぐちを専門とする研究者との共同研究などを企画し、集めた言語データの分析を進めることが課題である。

文献

Bernstein, Basil, 1971, *Theoretical Studies Towards A Sociology of Language*, London: Routledge & Kegan Paul.（＝1981、萩原元昭編訳『言語社会化論』明治図書出版.）

Fishman, Joshua A, 1972, *The Sociology of Language*, Newbury House Publishers.（＝

1974, 湯川恭敏訳『言語社会学入門』大修館書店.）
石崎博志, 2015,『しまくとぅばの課外授業』ボーダーインク.
かりまたしげひさ, 2006,「沖縄若者ことば事情——琉球・クレオール日本語試論」『日本語学』明治書院, 25(1): 50-59.
————, 2008,「トン普通語・ウチナーヤマトゥグチはクレオールか——琉球・クレオール日本語の研究のために」沖縄国際大学南島文化研究所編『南島文化』30: 55-65.
野原三義, 1998,「琉球・社会方言学への誘い——沖縄の若者言葉考」沖縄国際大学公開講座委員会編『南島文化への誘い』那覇出版社, 241-264.
————, 2005,「若者言葉」『うちなあぐちへの招待』沖縄タイムス社, 150-183.
大城朋子, 2017,「『うちなーやまとぅぐち』から『しまくとぅばルネッサンス』を考える——語学教育の視点から」沖縄国際大学公開講座委員会編『しまくとぅばルネサンス』編集工房東洋企画, 313-341.
佐藤郁哉, 1985,『ヤンキー・暴走族・社会人——逸脱的ライフスタイルの自然史』新曜社.
新城和博, 1990,「君が喋るうちなーぐち」『おきなわキーワードコラムブック日記版』沖縄出版, 233-235.
高江州頼子, 1994,「ウチナーヤマトゥグチ——その音声、文法、語彙について」沖縄言語研究センター編『沖縄言語研究センター研究報告3那覇の方言Ⅰ』245-289.
————, 2002,「ウチナーヤマトゥグチをめぐって」『国文学——解釈と鑑賞』至文堂, 67(7): 151-160.
————, 2004,「ウチナーヤマトゥグチ——動詞のアスペクト・テンス・ムード」『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系——標準語研究を超えて』302-329.
打越正行, 2011,「型枠解体屋の民族誌——建築現場における機械的連帯の意義」『社会学批評』別冊: 21-44.
————, 2016,「暴走族のパシリになる——『分厚い記述』から『隙のある調査者による記述』へ」木下衆・朴沙羅・前田拓也・秋谷直矩編著『最強の社会調査入門』ナカニシヤ出版, 86-99.
————, 2017,「沖縄『チビチリガマ荒らし事件』とは何だったのか？——建築業の現在から見えてくること」『現代ビジネス』(http://gendai.ismedia.jp/articles/-/53299, 2017.10.27).
————, 2018,「つくられたしーじゃ・うっとぅ関係——沖縄建設業の戦後史」広島部落解放研究所編『部落解放研究』24号, 47-67.
————, 2019,『ヤンキーと地元——解体屋、風俗経営者、ヤミ業者になった沖縄の若者たち』筑摩書房.
————, 2020a,「沖縄のヤンキーの若者と地元——建設業と製造業の違いに着目して」日本平和学会編『平和研究（「沖縄問題」の本質）』54号, 71-90.
————, 2020b,「排除Ⅰ——不安定層の男たち」岸政彦・打越正行・上原健太郎・上

間陽子編『地元を生きる——沖縄的共同性の社会学』ナカニシヤ出版，263-370.
屋比久浩，1987，「ウチナーヤマトゥグチとヤマトゥウチナーグチ」『国文学——解釈と鑑賞』至文堂，52(7): 119-123.

付記

本研究はJSPS科研費 26780300、18K02066、ならびに名桜大学総合研究所（現在、環太平洋地域文化研究所）の助成を受けたものです。またうちなーぐちの専門的知識に関しては石崎博志氏（佛教大）、そして査読者にアドバイスをいただきました。もちろん、表記や翻訳に関する最終責任は、筆者にあります。そして本稿で登場する男性たちは快く調査に協力してくれました。感謝申し上げます。